

特別展

# 狭山池築造と

# 須恵器窯

2004



# 目次

ごあいさつ

巻頭図版

第一章 狭山池築造と地形の改変

一 狭山池築造

二 飛鳥時代の堤

三 飛鳥時代の樋

四 付帯工事と地形改変

第二章 狭山池での須恵器生産

一 堤に造られた窯 狭山池一号窯

二 露頭していた灰原 狭山池二号窯

三 谷の裾に広がる灰原 狭山池三号窯

四 狭山池で最後に造られた窯 狭山池四号窯

五 盛土の上に造られた窯 狭山池五号窯

出品目録

図版目録

参考文献

27 26 24 20 18 16 14 12 10 8 7 6 6 3 2

凡例

一、本書は大阪狭山市立郷土資料館特別展「狭山池築造と須恵器窯」の展示図録として作成した。

二、本図録と展示の構成は一部異なるところがある。掲載写真は展示品のすべてではなく一部に参考資料として掲載したものである。

三、遺構の計測数値はm(メートル)、遺物の計測数値はcm(センチメートル)で表記している。

四、写真は(有)阿南写真工房に撮影を委託したほか、一部は関係機関から提供を受けた。

五、本書の執筆・編集は植田隆司が担当した。展示作業および展示解説作成は植田と吉井克信が分担した。

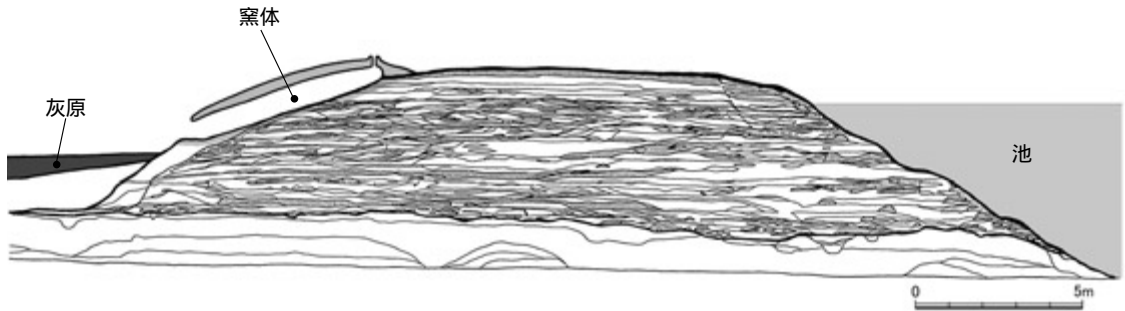
六、会期中に一部陳列替えを行うことがある。

【表紙】 狭山池五号窯調査地より狭山池を望む

【裏表紙】 狭山池五号窯出土壺



3. 飛鳥時代の堤に広がる狭山池1号窯の灰原



4. 狭山池1号窯と堤の位置関係(推定)

狭山池1号窯「SI1」

七世紀前葉に土を盛って築かれた狭山池の堤。その外側の斜面を利用して狭山池1号窯が造られた。発掘調査では、窯の中から掻き出した灰や須恵器の破片が堆積してできた灰原が、堤の斜面裾で見つかった。灰原は堤の北側にある池尻遺跡の水田跡の上まで広がっていて、その範囲は南北約三〇メートル・東西約一七メートルにもおよぶ。灰原から出土した須恵器の器種には、蓋杯・杯・高杯・短頸壺・甕・横瓶・甕などがあるが、日常の食器に使われた蓋杯と貯蔵用の甕の出土点数が多い。また、古墳時代から使われてきた蓋杯に混じって、飛鳥時代から使われ始める杯がわずかに出土している。飛鳥時代でも新しい時期の窯では、蓋杯よりも杯のほうがより多くつくられるようになる。こうしたことから、狭山池1号窯で生産された須恵器はTK二一七型式でも古い段階に編年できる。

堤の斜面では窯の本体を見つけることができなかった。おそらく、奈良時代以後に行われた池の改修のときに跡形もなく潰れたのだろう。だが、堤の土層断面図を見ると、灰原の南端から堤の頂部までは斜距離で七メートル以上の余裕がある。狭山池五号窯のような長さ六メートル程度の規模の窯ならば、十分に造ることができただろう。

堤の斜面から須恵器の窯が見つかったことは非常に重要である。狭山池の最初の堤は、西暦六一六年に伐採されたコウヤマキでできた東樋樋管の上に土を盛って築いている。そして、その堤の斜面に七世



45. 甕



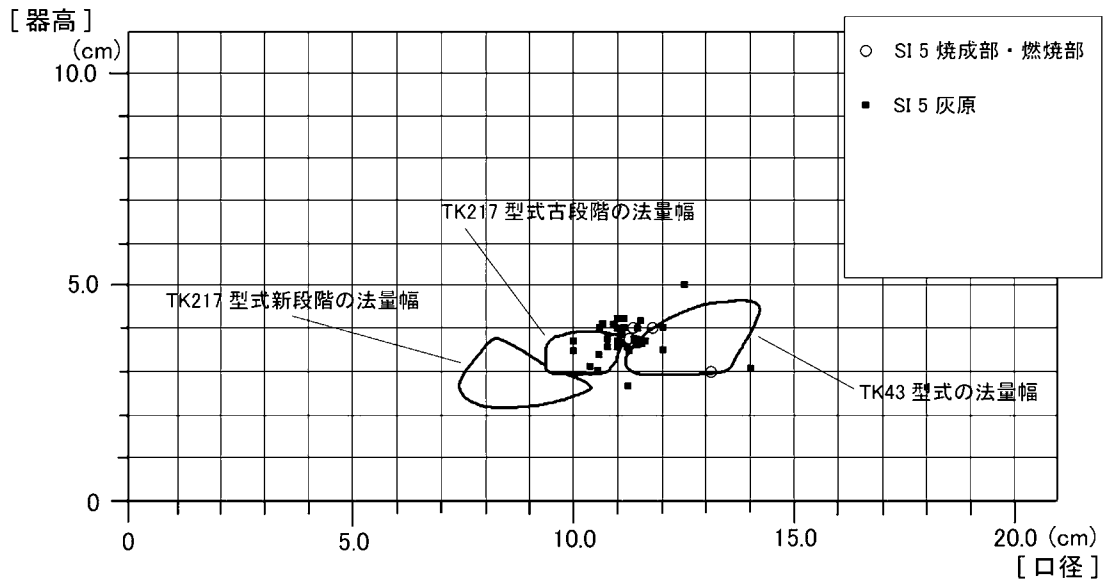
44. 甕



47. 甕



46. 甕



56. 狭山池5号窯 杯身の法量